

# 「踊る大捜査線」の哲学

—共に生きていく思想—

The Philosophy of Symbiosis in “Bayside Shakedown (Odoru Dai Sousasen)”  
—A Study of Philosophical and Social Background of a Japanese Detective drama—

三浦宏文

共通教育科目非常勤講師

## 抄録：

本稿では、日本の刑事ドラマである『踊る大捜査線』シリーズの初期の作品に注目して、この作品の社会的・哲学的背景を考察した。『踊る大捜査線』では、90年代後半のバブル経済崩壊後において「誰かのために」「誰かとともに」生きるという哲学を主人公青島俊作刑事の行動指針として描いていた。これは、自己実現や成果主義とは異なり、仏教哲学者椎尾辨匡の「共生（ともいき）」思想に繋がる新しい生きる指針であった。

## Abstract：

The purpose of this paper is to consider the philosophy of symbiosis which can be abstracted as philosophical annotation from a “Bayside Shakedown(Odoru daisousasen)”, a Japanese Detective drama series, which has got great popularity in 21st century Japanese society, and to investigate its social background. The thought of symbiosis, which is the style of ‘For Somebody’ and ‘With Somebody’, was drawn as principle of Syunsaku Aoshima’s behavior of the hero in this drama. This Aoshima’s principle of behavior is the new guideline of lifestyle for the Japanese person in the late 90’s of the post-bubble-economy collapse. And this Aoshima’s philosophy can be connected to the symbiosis-movement (Tomo-Iki-undou) of Benkyo Siio, a Buddhist philosopher.

キーワード：『踊る大捜査線』、90年代後半（バブル経済崩壊後）、共生、共生（ともいき）運動、椎尾辨匡、仏教哲学、浄土教

**Key Words:** “Bayside Shakedown(Odoru daisousasen)”, The late 90’s of the post-bubble-economy collapse, Symbiosis, The symbiosis-movement (Tomo-Iki-undou), Benkyo

## Siio, Philosophy of Buddhism, Pure Land Buddhism

### はじめに

1997年のテレビシリーズからスタートし、日本を代表する映画作品となった『踊る大捜査線』シリーズ。この第一級のエンターテインメント作品は、15年の長きにわたって人々に愛され続けてきている。それはこのシリーズの奥底に、単なるエンターテインメント作品にはない時代をとらえる視点や思想が隠されていたからであった。本稿では、この「踊る大捜査線」シリーズの諸作品の特に初期の作品に注目して、この作品を生み出した時代背景とそれに対してこの作品が示したひとつの哲学・思想を明らかにしたい。そして、最後にその思想と浄土宗系の仏教哲学者・椎尾辨匡の「共生（ともいき）」思想との共通点についても触れてみたい。

### 1 「踊る大捜査線」シリーズについて

#### 1-1 概要

「踊る大捜査線」は、まずフジテレビ系列の連続ドラマとして1997年1月7日に火曜21時～21時54分の枠でスタートし、3月18日までの11回が放送された<sup>1</sup>。本稿では、これを「テレビシリーズ」と呼んでおく。この「テレビシリーズ」は、平均視聴率は18.2%と爆発的な人気が出たわけではないが、最終回で23.1%の最高視聴率を記録した。この後、当時普及しつつあったインターネットを利用した熱心なファン同士のつながりやPRが功を奏し、97～98年にかけて三つのテレビスペシャルを経て98年に『踊る大捜査線 THE MOVIE』(以下『MOVIE 1』)として劇場映画化された。その後、2003年に劇場映画『踊る大捜査線 THE MOVIE 2 レインボーブリッジを閉鎖せよ!』(以下『MOVIE 2』)、2010年に『踊る大捜査線 THE MOVIE 3 やつらを解放せよ!』(以下『MOVIE 3』)が作られた。このうち『MOVIE 2』は、興行収入173.5億円と日本実写映画歴代興行収入1位、観客動員数1250万人を記録し、この記録は2015年8月1日現在未だに破られていない<sup>2</sup>。そして、2012年9月に最後の「テレビスペシャル」である『踊る大捜査線 THE LAST TV』の放送を経て、『踊る大捜査線 THE FINAL 新たなる希望』が完結編として上映され、15年の歴史に幕を下ろした。

#### 1-2 物語の特徴

「踊る大捜査線」シリーズの特徴は、主人公が織田裕二演ずる青島俊作という刑事であるいわゆる「刑事ドラマ」でありながら、事件の発生から犯人の逮捕までを追う従来のものとは異なり、警察を会社組織に置き換えその組織内の派閥争いや官僚機構の問題点などを描いたところにある。本シリーズでは、警視庁を本店、所轄署を支店と呼び、支店すなわち所轄署の現場の刑事で

ある青島の「所轄の刑事」であるがゆえの葛藤と、それを強い信念と仲間のサポートで乗り越えて行く成長過程を描くところに、この物語のテーマがある。

## 2 「踊る大捜査線」の時代

### 2-1 「ポスト・バブル時代」の生き方

『踊る大捜査線』の原点というべきテレビシリーズが放送開始されたのは1997年1月。現在(2015年)から18年前にあたる。このテレビシリーズ自体は前述したように平均視聴率18.2%とさほど高視聴率とは言えないものであったが、それがインターネットを中心に根強いファンを生み出し、後の大ヒットシリーズ『踊る大捜査線』の礎を創って行く。では、この時代はどんな時代であったのか。そして、なぜその時代に青島が新たなヒーローとして受け入れられていったのであろうか。『踊る大捜査線』は、映画制作や興業という側面のマーケティング的視野<sup>3</sup>や集団のマネージメント<sup>4</sup>という側面からいくつかの分析がなされているが、意外なことに物語の内容に則した考察はほとんどされていない。それは、この作品が完全なエンターテインメント作品であるとの認識から来るものであると考えられる。しかし、実は本作品は「テレビシリーズと映画が連続した一つの叙事詩」として見た場合にその内容の根底にあるテーマを看取できるようになってくる、というこれまでにない新しい構造を持っていたのである。

### 2-2 バブルを知る世代としての青島世代

『踊る大捜査線』テレビシリーズでは、主人公青島俊作の設定は以下のようにになっている<sup>5</sup>。青島は、平成2年に青山学院大学経済学部を卒業しコンピューター関連会社シンバシ・マイクロシステムに入社する。同社では優秀な営業マンとして2年間トップの成績を残す。しかし3年後の平成5年、それまでのサラリーマン生活に矛盾を感じて退社し、警察官に転職する。その後4年ほどいわゆる「交番のお巡りさん」として充実した日々を過ごす。そして、いよいよ平成9年1月に湾岸署刑事課強行犯係に配属され念願の刑事としての生活が始まる。この平成9年1月というのが、まさにテレビシリーズが始まった時期であり「脱サラ」した刑事青島俊作の活躍がまさにここから始まった。

ここで、青島の年齢と大学卒業、及び警察官に転職した時期について注目したい。青島はそれを演ずる俳優織田裕二の実年齢と同じ年齢の昭和42年生まれに設定されており、平成9年1月当時29歳である。そして、青島が青山学院大学を卒業した平成2年はまさにバブル経済最後の絶頂期であり、警官に転職した平成5年はそのバブル経済が崩壊した直後であった。つまり青島は、バブルの絶頂期に青山学院大学という東京のど真ん中にある大学で大学生活を送り、恐らく当時の売り手市場の就職戦線で難なく就職を決め、順風満帆の社会人生活をスタートさせていた世代なのである。

当時、この青島世代の男性に人気のあった漫画に『課長 島耕作』<sup>6</sup>という作品がある。団塊の世代に属する主人公島耕作は、やり手のビジネスマンとして大企業の中を生き抜いて行く。組

織内の派閥争いに巻き込まれながらも自分の信念を貫き、女性にももて常に前向きに行動していく鳥は、当時の若い男性社会人の理想像でもあった。青島も、当初は鳥のようなビジネスマンを目指していたのかもしれない。

### 2-3 「成果主義」ではないものへ

青島は、その就職した会社シンバシ・マイクロシステムで前述した通り2年間トップという優秀な営業成績をあげている<sup>7</sup>。しかし、なぜか青島は突然その会社を辞める。テレビシリーズ第1話「サラリーマン刑事と最初の難事件」で青島はその理由について、鍵を大量に持っていた不審な男<sup>8</sup>の取り調べの中でこう話している。

「営業やってて、いやになっちゃってさ。毎日毎日おんなじ人の所に行って、ぺこぺこぺこ頭下げて……僕には耐えられなかった。君もだろ？」

「刺激なくて、生活マンネリで、毎日つまらないくせに」

「営業先のお得意さんに言われたよ。君が来るとうちの社員の手が止まる。君はうちの会社の寄生虫か？って……。その日に辞めた。人間でいたかったから。」<sup>9</sup>

この台詞から、サラリーマン時代の青島はかなりのやり手で、時には少々強引な手法で契約をとっていたことが窺われる。このことは、テレビシリーズ第7話「タイムリミットは48時間」中で容疑者の情報を知っているとみられる墨田綾子が勤める初芝貿易に潜入する時の手法からも類推できる。青島は営業マンのふりをして巧妙かつ強引な手段で社内に潜入し、社内の人間から情報を集めつつ最終的に墨田綾子に接触している。この捜査手法を青島自ら「営業かけてきます」と表現していることから、サラリーマン時代の青島が類似の手段で契約にこぎ着けていたことは想像に難くない。それゆえに、二年間トップという優秀な営業成績も可能となったのであろう。しかし、青島は次第にそのようないわば「成果主義」的な仕事のしかた<sup>10</sup>に疑問を持ち始めたと考えられる。

この青島の心情は、同時代の若い社会人たちに共通しているものがある。運良くバブル崩壊前の売り手市場で就職できたのはいいものの、バブル崩壊後の不景気で業績はなかなか伸びず、リストラも進む。リストラが進めば社員の人数が減り、社員一人の担当する仕事量は増え、忙しさは前と変わらないどころかより仕事がハードになる。不景気で会社が新卒採用を控えたため、自分たちの世代がずっと一番下っ端で何年経っても同じような仕事ばかりやらされている。自分のやっている仕事に、やりがいを感じられない。青島とほぼ同世代の私の周りの友人たちも、この時期に会社を辞めて転職したり新たな道を探そうとしたりする者が多かった。

この90年代後半から2000年代初頭のいわゆる「失われた十年」に就職の時期を迎えていた「ロスト・ジェネレーション」<sup>11</sup>と呼ばれる世代は、正社員として採用されず、アルバイトや派遣労働に従事するしかない境遇に苦しんでいた。この問題は、後の秋葉原の無差別殺人事件などとの関連で様々な考察がなれている。この「ロスト・ジェネレーション」の少し上に当たる青島たち

の世代は、その下の世代に比較すれば確かに恵まれていたと言えるかもしれない。しかし、初めから「恵まれていない」という状況にあった下の世代と違い、青島たちの世代はその前の「よかった時代＝バブル期」を少しだけでも生きただけに、突然「生き方のルールが変わった」という状況にさらされていた。これはこれで、かなりの心理的社会的な負担があったといえる。

このように、バブル期に就職し、バブル崩壊後生き抜かなければならなくなった青島世代の人間は、自分たちの人生の指針をもう一度考え直さなければならなくなってきた。『課長島耕作』の島に憧れた世代は、自分たちが島とは違う生き方を模索する必要があることに気がき始めた。やり手の営業マンから所轄の刑事へと転職して行く青島の姿は、まさにこの青島世代のポスト・バブル時代の生き方を示す一つのモデルでもあった。では、青島が警察官に転職するということは、一体どのような意味があったのだろうか。

#### 2-4 「自己実現」を越えて

「自己実現」という言葉がある。もともとは、ロジャースやマズローといった人間性心理学の用語<sup>12</sup>であるが、これが広まって様々な形で使われるようになった。今の自分がやっていることではない、本当に自分がやりたいことを見つけて実現する、そこにこそやりがいがある、といったような俗流解釈が世間に溢れ、転職することがとても格好良いことのように語られていた時代があった。青島や私が大学生時代を過ごしたバブル期である。青島がシンバシ・マイクロシステムをやめて警察官に転職したのも、そのような転職を是とする時代の価値観があったのかもしれない。しかし、青島は警察官になり、そのようないわゆる俗流解釈された「自己実現」というような形のやりがいは、違う仕事の充実感を感じる。それが、前述したテレビシリーズ第1話「サラリーマン刑事と最初の難事件」の同じ取り調べのシーンで語られている。

青島は平成6年に練馬警察署地域課に配属されて交番勤務になり、巡回中に一人暮らしの老女の家に入ったこそ泥を捕まえる。その老女はそれ以来眠れなくなってしまい、心配した青島は毎日その老女の就寝時間に毎晩巡回をするようになる。その老女は、おかげで眠れるようになったと、感謝の気持ちを込めてお守りを青島に渡す。それを取り調べ相手の男に見せながら、青島はこう語る。

「営業やってた時って、けむたがられてばかりだったのに、仕事して人に感謝されたのって初めてで……。」<sup>13</sup>

青島は、ここで初めて「自分のために」ではなく「誰かのために」役に立つ喜びを見出している。それまでのやり手の営業マン時代は、自分の成績を上げることそのものが自分の目標であり喜びであった。しかし、その目標や喜びのために血道を上げることで、他者である得意先からは「寄生虫」と揶揄されるような存在になってしまっていた。警察官になってからは、同じように一生懸命仕事をやると、他者である老女から感謝される。まさにここで描かれているのは、自分の仕事で「誰かのために」役立っていることを実感できた瞬間である。もちろん、これは民間企業の

営業部門に携わる人を貶めるものではない。当然であるが、営業部門の仕事も「誰かのために」に確実に役立っている側面がある。この場合、青島がより警察官の仕事に「誰かのために」役立っていることを感じやすかったということである。

この青島の「誰かのために」という行動規範は、後になっても揺るがない彼にとっての実践哲学の核になる。それは、「テレビシリーズ」最終話「青島刑事よ永遠に」のラストシーンにも表れている。青島は同僚の真下刑事が撃たれて重傷を負った拳銃発砲未遂事件において、捜査本部の命令を無視した室井慎次との単独捜査により、湾岸署捜査課から外され以前いた交番勤務に戻されてしまう。この移動は一般的に言えば「左遷」であり、くさってもおかしくない状況である。しかし、青島は100円玉を拾って届けてくれた小学生に対して嬉しそうに「正しいことをすると、いいことがある」と書いたメモと一緒に自らのポケットマネーから100円を与えておくり出す。また、前述した青島に見回りをしてもらって眠れるようになり、お礼にお守りをくれた老女（ちなみにこの老女は「吉田のおばあちゃん」といい、『MOVIE 1』で誘拐される吉田副総監の実母である）が、青島が帰ってきたことを聞きつけて世間話に来ると、喜々として応対している。

老女「あ～お～し～まさん！帰ってたんだってね」

青島「吉田のおばあちゃん！……ええ。やっぱりこの街はぼくがいなきゃって思いましたね」

14

青島は、確かに「成果主義的」なサラリーマン時代とは違う喜びを見つけ出していたに違いない。もちろん、その喜びは「自己実現」的なものではなく、「ここではない、どこかへ」と飛び出した青島がようやく最初にたどり着いた警察での、「誰かのために」という行動原理からのものであった。

## 2-5 警察への幻滅

ただ、青島はそこで交番勤務を自分の天職として選ぶようなことはしなかった。そこに青島の「自己実現」願望の根っこの部分があった。おそらく青島は、幼い頃から刑事ドラマが好きで、そこで事件捜査に活躍する刑事たちに憧れていた。その片鱗は、第1話「サラリーマン刑事と最初の難事件」の冒頭部分での青島の取り調べ実習のシーンにも出ている。青島は、昔ながらの刑事ドラマそのものといった取り調べを展開し、犯人役の警察官から「刑事ドラマの見過ぎだ」とあきれ顔で注意されている。刑事になること、刑事になって颯爽と捜査をし、事件解決に尽力すること。それが、青島のまさに「自己実現」であった。

しかし、青島はそこで所轄の刑事の現実を知らされる。青島のような所轄署に所属する警察官は、たとえ刑事であっても大きな殺人事件などの捜査はさせてもらえず、本庁の捜査員のサポート役に徹さなければならなかった。この所轄の刑事のジレンマは、「踊る大捜査線」という作品のシリーズ全体を通した大きなテーマであった。

そして、さらに青島にとってさらなる幻滅が待っていた。青島が「ここではないどこかへ」の

思いのもとに「成果主義」に追い立てられる「会社」から移ってきた警察という組織も、実は全く「会社」と同じような組織であったのだ。テレビシリーズ第3話「消された調書と彼女の事件」では、高級官僚の子息が少女のバックを盗むというひったくり事件が発生するが、そこで青島の警察組織に対する幻滅の言葉が語られている。官僚同士のパイプを使ってそのひったくり事件のもみ消しを頼まれた上司の命を受けてキャリア組の捜査一課管理官で、後に青島と盟友になる室井慎次が湾岸署に現れる。しかし、事件を担当した恩田すみれの激しい抵抗にあい膠着状態になる。現場に政治を持ち込むなど主張するすみれに対して、自分は政治をしにきたんだと室井も一歩も引かない。次第に、室井の出した条件通りに解決が図られて行く。そこで青島がぼつりつつぶやく。

「これじゃ前いた会社と変わらないや……。」<sup>15</sup>

青島のいた会社では、社長の親戚である社員の使い込みを隠すために社員全員に臨時ボーナスを支給するということがあったのだ。青島は、そういうもたれ合いが嫌でサラリーマンをやめたということを室井に明かしてこう問いかける。

「警察は会社じゃないでしょ？」<sup>16</sup>

そこには、「会社」という場所ではないどこかとして警察を求めた青島の悲痛な叫びがある。

しかし、青島はさらに裏切られる。テレビシリーズ第4話「少女の涙と刑事のプライド」では、青島の「警察は会社ではない」という言葉に心を動かされた室井が、異例の抜擢として青島を警視庁捜査一課の応援捜査員として招集する。それは、室井自身捜査一課の刑事たちの「成果主義的」な行動に憤りを感じていたからであった。室井は、湾岸署から招集した青島にこう語りかける。

「うちの刑事たちをみてみる。警視庁の捜査一課だというプライドばかり高くて、手柄ばかり考えている。成績と出世の事しか考えてない。」<sup>17</sup>

実際に、その前のシーンでは点数や逮捕した時のマスコミの花道をどう通るかの話をしながら歩く捜査一課の捜査員が描写されている。青島は、完全に「成果主義ではないどこかとしての警察」という理想を捨てなければならなくなった。では、青島はその後なにを支えに所轄の刑事としての仕事をやりつづけていくのだろうか。

## 2-6 誰かとともに一仲間の発見—

前述したテレビシリーズ第4話「少女の涙と刑事のプライド」で青島は、室井の期待に応えられず二度のミスをしてしまう。一度目は、本庁の捜査員にそっぽを向かれ単独でバーを捜査している時に仕事帰りの湾岸署の同僚たちである恩田すみれと真下正義に出会う。その時、恩田が出

くわしたスリを捕まえるために見せた警察手帳を被疑者に見られて、逃げられてしまう。二度目は、被疑者がクラブに現れるという情報の元に張り込んでいた青島の目の前で、若い女性が男に殴打されているという状況に出くわしてしまう。青島は室井のそこで待てという命令を守れず、女性を救いに飛び出してしまう。そのために、被疑者はまたも逃走してしまう。これによって青島は、ほぼ本庁の捜査一課に抜擢される機会はなくなったといってよい。しかし、この失敗が青島にとってその後の生き方を決めるきっかけとなったのである。

二度目の失敗後、「なぜ命令を聞かなかった?」と、つめよる室井に対して青島は「責任はとります」として警察を辞める意思を示す。その時、湾岸署の同僚たちである和久、恩田、真下や魚住係長らが被疑者を捕まえて颯爽と現れる。まさに胸のすくシーンである。ぼう然と彼らを見つめる青島に対して恩田がこう言い放つ。

「おいしいコーヒー入れて、青島君。」<sup>18</sup>

真下が、それに付け加える。

「空き地署で待ってますから！」<sup>19</sup>

青島は、そこでようやく気付いた。いや、もう既に無意識のうちに感じ取っていたのかもしれない。自分の居場所は、警視庁捜査一課ではなく、「空き地署」=湾岸署であることを。そして、「成果主義」ではない新しい生き方は、なんなのかも。それは、「誰かとともに」生きるということであった。彼には、コーヒーを入れて欲しいという年下の先輩すみれがいる。待ってますからと叫ぶ、後輩の上司真下がいる。この段階で、青島は自分の生き方の指針がようやくはっきりしてくる。青島は、颯爽と凶悪犯を追う第一線の刑事になるという形での「自己実現」とは違うやりがいを見つけた。いや、「自己実現」という形とは別の行動原理を手に入れた、といてもいいかもしれない。それは、「仲間と共にある」という生き方である。これは、この後の物語の展開の中で繰り返し確認されることになる。

## 2-7 袴田課長との絆の形成

青島俊作という男は、一言で言うとやんちゃな男である。一度自分の行動原理を見つけたからといって、杓子定規にそれを守り続けて生き抜くなどと言うことは出来ない。最終話の和久の言葉借りれば「ちゃらちゃらしてるし、勘違いばかりする。勇み足の王者だよ」といった人物である。したがって、見つけた居場所からはみ出したり、仲間から煙たがられたりする。しかし、その度にまた絆を強めた形で居場所を、仲間を再発見して行く。それが、テレビシリーズ後半から二つのスペシャルドラマ、『MOVIE 1』への流れでの青島の遍歴である。

青島は、テレビシリーズ中盤あたりからその本領を発揮し、型破りな行動を取り始める。その度に、湾岸署の仲間との絆を深めて行く。テレビシリーズ第9話「湾岸署大パニック 刑事青島



危機一髪」では、殺人事件の加害者の愛人の警護にあたっていて、復讐しようとする被害者の兄を取り押さえようとしたときに刺されてしまう。幸いにして大事はなかったが、所轄に情報が下りてこないことに青島は憤る。上司である袴田課長は、そんな青島をなだめながら、警視庁の室井に説明を求めるが、いかにも官僚的な室井の答弁に激怒して電話口で叫んでしまう。

「私の部下の命をなんだと思ってるんだ！」<sup>20</sup>

一見、出世にしか興味がなく部下のことなど考えていないように見えていた袴田課長であるが、彼をしてこう怒鳴らせるほどの絆を青島は知らず知らずのうちに創っていた。

袴田が青島を認めているということは、この後の「歳末特別警戒スペシャル」でも出てくる。銃を持った犯人に湾岸署が占拠された時、警視庁捜査一課から来ていた新城管理官が事態の収拾をはかろうとして自ら犯人を射殺しようとする。その新城を青島がこう言って止める。

青島「逮捕するんです。俺達は処罰はしません……逮捕するのが現場の刑事の仕事です。」

新城「お前は刑事じゃないだろ。他の課に回されたんだろ。どこの課だ？ 交通課か？ 会計課か？」<sup>21</sup>

実際に青島はこの一年ほど前、テレビシリーズ最終話「青島刑事よ永遠に」の時の捜査本部を無視した室井と二人での単独捜査が原因で他の所轄にとばされており、ようやく室井の根回しによって湾岸署に移動が決まったばかりであった。しかし、その湾岸署で青島は問題児と見なされ、どの部署も青島の配属を嫌がりたらい回しにあっていただけだった。その事情を知っている新城が、青島に対して侮蔑的に言い放ったのが後の台詞である。この新城の言葉に対して、犯人に銃を向けられたまま袴田課長はこう反論する。

「青島君は、刑事課です。私の部下を馬鹿にしないでいただきたい」<sup>22</sup>

袴田はこう言い放った後、恐怖のあまり失神してしまうが、このような緊急事態の時に部下としての青島をかばえるというのは、二人の間に強い絆が出来ている証拠である。

## 2-8 室井との相克

一方で、後に盟友となる室井慎次との関係はどうなってゆくのか<sup>23</sup>。ここでは湾岸署という「居場所」や「仲間」との関係性のみで論じておきたい。

湾岸署の刑事になった当初の青島にとって、キャリア組で警視庁の捜査一課管理官という要職にいる室井はいわば雲の上の人であった。しかし、青島の警察という組織に対する思いを知り、室井の方が心を動かされて行く。やがて、青島も室井に対する信頼感を持ち始め、互いに信念を共有し合うようになる。しかし、室井はまだ当時キャリア組ではあるがさらに上の警察官僚たち

と現場の調整役に過ぎない立場であるために、心ならずも青島たち所轄の警察官たちを結果的に裏切ってしまう事が何度かあった。上述したテレビシリーズ第9話「湾岸署大パニック 刑事青島危機一髪」で袴田課長が激高した時もそうである。この時、所轄の湾岸署から情報を捜査本部に上げていたにも関わらず、情報量の多さに室井の部下の刑事たちが対応しきれず、結果的に不審者の情報が所轄の青島たちにおいてこなかったため、青島が命の危険にさらされたのであった。

その後、最終話「青島刑事よ永遠に」で室井は青島とともに単独捜査をした際に青島に自分の信念を明かし、二人は強固な信頼関係をつくりあげるが、それも室井の出世や警察組織における立場の変化によって何度となく危機に瀕する。特に、青島以外の湾岸署の警察官たちとは時折関係が険悪化する。その時青島は、自分自身は室井への信頼を持ち続けながらも、まず湾岸署の「ともにいる」仲間たちとの絆を大事にしている。そして、それは最初の方で述べた「誰かのために」という行動原理とも重なっていたのであった。それが一番如実に表れているのがテレビスペシャル版「秋の犯罪撲滅スペシャル」である。

青島と恩田すみれ、そして真下正義の3人は、捜査本部の命を受けて放火殺人未遂事件の主犯である女性容疑者を成田空港から湾岸署へ護送する事になった。ところが、女性容疑者のトイレのために立ち寄ったレストランに強盗が入り、それを取り押さえている間に女性容疑者は逃走してしまう。その時すみれは、女性容疑者から「相談がある」と話しかけられ、自分の名刺を渡していた。すみれは、女性容疑者の身体にある傷が気になっていたのだった。

警察上層部はこの事件を聞き、すみれがわざと女性容疑者を逃がしたのではないかと疑い始める。すみれは、自分自身が暴行事件の被害者でもあり、女性に暴力を振るう容疑者に対して感情的になるという報告が警察上層部に上がっていたからだ。したがって、暴力を受けていた女性容疑者に同情し、逃がしたのではないかとこの疑惑を持たれたのであった。そして、そのすみれを調べる役割を担わされたのが、警察官を裁く立場である監察官となった他ならぬ室井だった。

紆余曲折をへて、接触してきた女性容疑者をそっと迎え入れようとしていたすみれたちは室井に裏切られ、目の前で本庁の捜査員にその女性容疑者を取り上げられることになる。ちょうどその時、青島たちは独自に捜査して今回の放火殺人未遂事件の被害者であるその女性容疑者の恋人を暴行容疑で逮捕していた。実は、この女性容疑者はエスカレートする恋人の暴力に命の危険を感じ、「殺さないこっちが殺される」という思いで恋人に対する放火殺人を依頼したのであった。すみれや青島たちは、この男の暴力に悩んだ女性容疑者の恐怖も解決したかったのだった。しかし、捜査本部にとっては、そのような女性容疑者が受けた暴力やその苦しみなどどうでもいいことであった。放火殺人未遂事件の容疑者を逮捕することが、まず優先される事であったからだ。そして、室井にとっても捜査本部や警察上層部に情報をあげなかったすみれや青島の行動の方が、問題視すべきことであった。

室井たち本庁の捜査員たちが去った後、すみれは刑事を辞める決意をほのめかし、涙を流しながら室井や警察上層部に裏切られた悔しさを青島に語る。

「一緒に仕事して……わたしはこの仕事がか何か判った……自分の信じていることをやり通せ

ば、思いは必ず通じるって……でも、警察はそれを許してくれなかった」<sup>24</sup>

青島は、それに対してこう応える。

「室井さんたちも警察だけど、おれ達の警察だってある。ちょっと頼りないけれど、おれやすみれさんの思い理解してくれている人たちがいる。おれは、おれ達の警察、結構好きだよ。」<sup>25</sup>

青島がすみれに促す方には、和久、雪乃、魚住、真下、中西、緒方、森下の湾岸署の面々の顔が合った。

ここで、青島が確固とした自分の行動原理を先輩刑事であるすみれに対して示していることに注目したい。青島は、どこかに自分が無条件で受け入れてもらえる場所を見つけようとするような行動は取らない。むしろ青島は、コミュニケーション能力に長けており、どんな場所でもそれなりに適応していける能力は持っている。そのことは、この「秋の犯罪撲滅スペシャル」冒頭の三芝エレクトロニクス社への内定捜査のシーンでもわかる。青島は完全に一社員として同僚や上司たちとも関係を作っていた。青島は、その場所に自ら理解者をつくり仲間を獲得して行くという行動指針を常に取るのである。上にあげた青島の言葉の意味は、今まさに警察という組織に絶望して辞める決心をした先輩であるすみれにたいして、「おれ達の警察」という自らの居場所を共に創ってこうという提案なのである。そして、そのための仲間たちはここにいるということを示しているのである。まさに、「誰かとともに」という青島の行動原理の核になる部分がこのように示されている。

そして、もう一つ青島の行動原理として指摘できることは、その理解者や仲間のためにできることを、自らが犠牲を厭わずにやっていくということである。これは、前に論じた「誰かのために」という行動原理につながるものである。実際この「秋の犯罪撲滅スペシャル」では、当初室井にすみれの監視を命じられていた青島は、最終的にはすみれの思いを遂げさせようと、上層部の命に逆らって独自の捜査をしている。そのために、減俸や謹慎などの処分が待っているにも拘わらずにである。

また、『MOVIE 1』のラストシーンにも、この「誰かのために」という行動原理が如実に表れている。この『MOVIE 1』での「副総監誘拐事件」の捜査の際に、青島は容疑者の少年の母親に刺されて重傷を負う。幸い命には別状はなかったが、復帰までにはかなりの時間を要する程の大けがであった。しかし、青島は看護師に止められながらも、早速リハビリを始めてしまう。その時に、青島は制止しようとする看護師にこう語りかける。

「早く現場に戻らなきゃ。事件の時おれないとみんな困るんです。」<sup>26</sup>

そして、室井との約束の話をした後、湾岸署の面々の話になる。

「約束多くてね。すみれさんっていう女刑事いるんだけど、おれないとすぐ泣いちゃうし、真下っていうのは頼りないし、雪乃さんはおれに守ってねなんて言うし、課長は、ゴルフばかり。和久さんって頑固じじいの指導も受けてあげなきゃいけないし。言ったら、心配になってきた。早く治して、帰らないと」<sup>27</sup>

その後、青島はまた松葉杖を手に決意の表情でリハビリを始める。ここではこの青島の台詞に現れている湾岸署への思いに注目したい。青島は、まさに湾岸署の面々のために、一日でも早く復帰をしようと早過ぎるリハビリを苦痛に耐えながら行っている。「誰かのために」という青島の行動原理が象徴的に表れているシーンである。

### 3 結語 - ポストバブル時代の生き方 -

#### 3-1 「誰かのため」に そして 「誰かとともに」

ここまで、論じてきて「踊る大捜査線」という作品の「テレビシリーズ」から『MOVIE 1』までの通底したテーマの一つがはっきりした。「踊る大捜査線」シリーズはバブル経済崩壊の数年後である1997年に登場し、青島という主人公の湾岸署という警察署での活躍を通して、バブル崩壊後の若い社会人に新しい行動原理を示したのである。そして、それまでの自己実現幻想や上昇志向に支えられた「成果主義」的な行動原理が必ずしも通用しなくなったポスト・バブルの時代に「踊る大捜査線」シリーズが示した行動原理は、一言で言えば「誰かのために」「誰かとともに」である。

もちろん、経済至上主義や成果主義に対する批判をテーマにしたドラマは昔から多くあった。しかし、それらの作品が使った図式は「仕事 vs 愛情」「お金 vs 家族の絆」の対立図式を使ったいわゆる「恋愛ドラマ」や「ホームドラマ」が多かった。

#### 3-2 恋愛でも家族でもなく

例えば、同じフジテレビ系列の少し前の代表的なドラマに『101回目のプロポーズ』<sup>28</sup>と『ひとつ屋根の下』<sup>29</sup>というものがある。『101回目のプロポーズ』は、武田鉄矢扮する中年サラリーマン星野達郎が、手違いのお見合いから美しいチェリストである薫を本気で愛し、様々なものを犠牲にして薫と結ばれるというラブロマンスである。この物語の中で、達郎は会社での課長の地位やボーナスを薫のために犠牲にし、果ては一度別の男性に走った薫の心を取り戻すために会社を辞め司法試験を受験するという荒唐無稽とも言える行動に出る。その結果達郎は司法試験にも落ち、社会的地位や経済的基盤を全て失うが、そのかわりに薫の愛を得るのである。『ひとつ屋根の下』は、両親を亡くした兄弟姉妹が、江口洋介演ずる長男柏木達也を中心に結束していく家族再生の物語である。達也は、高校卒業後実業団のマラソン選手として活躍するが、両親の死後離れ離れになった弟妹たちと一緒に暮らすために実業団を退社しクリーニング店を開業する。婚約者との破綻や弟妹の反発、経済的な困窮など様々な困難に遭いながらも、達也の熱意により兄

弟姉妹たちは互いの絆を強め、家族として再生して行く。

この二つのドラマは、90年代を代表する名作ドラマであるが、いずれも「仕事や出世をとるか恋愛を取るか」「経済的安定をとるか貧乏でも家族の絆を取るか」という明確な対立図式を元に展開されている。

だが、「踊る大捜査線」シリーズには、このような「仕事 vs 愛情」「お金 vs 家族の絆」などというわかりやすい対立図式は出てこない。これは、この作品が「組織」をテーマに据え、それ以外のものをできる限り削り落とした形になっていることが、恐らく第一の原因であろう。例えば、青島と柏木雪乃や恩田すみれとの関係性も、恋愛関係寸前の描写はあるが、結局「仕事仲間」としての関係性に留まっている。つまり、「仕事対家庭」「出世対愛情」といった分かりやすい対抗軸ではない形で、この作品は徹頭徹尾描かれているのである。もちろん、「恋愛」や「家族愛」は人間にとって永遠のテーマであり、実際この時代でも特に「恋愛」をテーマにしたドラマは上記のドラマ以外にも多数作られ高い視聴率や評価を受けている。しかし、この「踊る大捜査線」という作品はあえて「仕事」や「組織」を問題にする中で新しい行動指針を提示しているのである。それは、ここまで各エピソードやシーンを丹念に見てきたことでよくわかるであろう。

あくまで「仕事」や「組織」を語る中で、青島が示したのはまず「誰かのために」役立つということであり、そして「誰かとともに」仕事に取り組むことであり、さらにその仲間や理解者である「誰かのために」全力を尽くすことであった。

### 3-3 椎尾辨匡の共生（ともいき）思想との類似性

ところで、この「誰かのために」「誰かとともに」という生き方の原理は、浄土宗系の仏教哲学者・椎尾辨匡（1876-1971）の提唱した共生（ともいき）思想との類似性を指摘することが出来る<sup>30</sup>。椎尾は、仏教の「縁起」思想を自らの存在論の根拠として、

「一切は縁によってできあがってゆくのであります。誰人といえども一個人として独存すべきものではありません。この肉体が衆縁の合成であるように、その存続も衆縁の力であり、縁に遠近の差別でこそあれ、全法界をあげて、一切が相依相関でないものではありません。すべては共同であり共生であり、社会のおかげであります」<sup>31</sup>

とする<sup>32</sup>。青島の「誰かのために」「誰かとともに」という行動原理は、椎尾の言葉で言えば「縁起に基づいて共に生きていく思想」ということになる。ここに青島の行動と仏教的な系譜を持つ「共生」の思想との共通点を見ることが出来るのである。

椎尾の共生（ともいき）思想は、後に「共生会」という団体による「共生（ともいき）運動」<sup>33</sup>を経て、現在浄土宗においても引き継がれさらなる深化を遂げている<sup>34</sup>。また浄土宗系の仏教学者たちによる椎尾の共生思想に対する批判的検討も進んでいる<sup>35</sup>。したがって、本稿で考察してきた『踊る大捜査線』というテレビドラマにおける主人公青島俊作の行動原理との共通点に関しては、更なる検討が必要になるが、もはや紙幅が尽きたので本稿では共通点の指摘だけにとどめ

たい。

## 参考文献

- 朝日新聞 「ロスジェネ」取材班『ロスジェネレーション さまよえる2000万人』朝日新聞社・2013年
- 梅原 猛 『梅原猛の仏教の授業 法然・親鸞・一遍』PHP文庫・2014年
- 角川書店編 『谷疑者室井慎次完全ファイル』角川書店・2005年
- 神谷正義 「椎尾辨匡師と共生思想」『印度学仏教学研究』第49巻第1号・2000年
- 同 「法然教学と共生」『法然仏教の諸相—藤本浄彦先生古希祈念論文集—』（藤本浄彦先生古希祈念論文集刊行会編）法蔵館・2014年
- 金井壽宏・田柳恵美子『踊る大捜査線に学ぶ組織論入門』かんき出版・2005年
- 河波昌 「浄土教における共生思想の展開—とくに椎尾辨匡の立場から—」菅沼晃（研究代表）『仏教を中心とした共生の原理の総合的研究』（平成8～10年度科学研究費補助金（基盤研究（A）(1)）研究報告書）東洋大学・1999年
- 君塚良一 『『踊る大捜査線』あの名台詞が書けたわけ』朝日新書・2011年
- 君塚良一（脚本）『踊る大捜査線 湾岸警察署事件簿（シナリオ・ガイドブック）』キネマ旬報社・1998年
- 同 『踊る大捜査線 THE MOVIE シナリオ・ガイドブック』キネマ旬報社・1999年
- 同 『踊る大捜査線 THE MOVIE 2 レインボーブリッジを封鎖せよ！シナリオ・ガイドブック』キネマ旬報社・2003年
- 同 『踊る大捜査線 THE MOVIE 3 やつらを解放せよ！シナリオ・ガイドブック』キネマ旬報社・2010年
- 同 『踊る大捜査線 THE FINAL 新たなる希望シナリオ・ガイドブック』キネマ旬報社・2012年
- ぴあ編 『踊る大捜査線 THE MAGZINE』ぴあ・1998年
- 同 『踊る大捜査線 THE MOVIE 3 やつらを解放せよ！PERFECT BOOK』ぴあ・2010年
- 同 『踊る大捜査線 THE FINAL 新たなる希望 COMPLETE BOOK』ぴあ・2012年
- 関本浩矢 「日本企業における成果主義導入・定着に関する一考察」『商大論集』第57巻第1号・兵庫県立大学・2005年・pp.113-132.
- 椎尾辨匡 『共生の基調』初版1929年（再版1930年）（『椎尾辨匡選集』第9巻・椎尾辨匡選集刊行会・山喜房仏書林・1971年）
- 同 『共生講壇』初版1924年（第三版1928年）（『椎尾辨匡選集』第9巻・椎尾辨匡選集刊行会・山喜房仏書林・1971年）
- 日本映画専門チャンネル編 『『踊る大捜査線』は日本映画の何を変えたのか』幻冬舎新書・2010年
- 弘兼憲史 『課長 島耕作』講談社 全17巻・1983年～1992年
- 法輪智恵 編 『踊る大捜査線研究ファイル』フジテレビ出版・1998年
- マズロー、アブラハム・H（小口忠彦監訳）『人間性の心理学』産業能率大学出版部・1971年
- 三浦宏文 「刑事ドラマにおける義務（dharma）の遂行の一考察—ドラマ『相棒』と『踊る大捜査線』を事例として—」『実践女子大学短期大学部紀要』第36号・実践女子大学短期大学部編・2015年3月
- 村上真瑞 「法然上人における諸行と共生」『法然上人八〇〇年大遠忌祈念 法然仏教とその可能性』（佛教大学総合研究所編）法蔵館・2012年

ロジャーズ, カール・R ( 畠瀬直子訳) 『人間尊重の心理学 - わが人生と思想を語る -』 創元社・2007年 (新版)

## 映像資料

『踊る大捜査線 THE COMPLETE DVD BOX』 フジテレビ・2005年

『踊る大捜査線 THE MOVIE 3 やつらを解放せよ! DVD カエル急便おまとめパック』 フジテレビ・2011年

『踊る大捜査線 THE FINAL 新たなる希望 DVD ファイナルセット』 フジテレビ 2013年

『交渉人 真下正義 DVD プレミアムエディション』 フジテレビ・2005年

『101回目のプロポーズ DVD-BOX』 フジテレビ・2001年

『ひとつ屋根の下』 (VHS) (1) ~ (4) フジテレビ・1993年

『ひとつ屋根の下2』 (VHS) (第1巻~第4巻) フジテレビ・1998年

『容疑者 室井慎次 DVD プレミアムエディション』 フジテレビ・2006年

## 注

- 1 この「テレビシリーズ」については、ぴあ編『踊る大捜査線 THE MAGZINE』ぴあ・1998年や法輪智恵 編『踊る大捜査線研究ファイル』フジテレビ出版・1998年、及び君塚良一脚本『踊る大捜査線 湾岸警察署事件簿』キネマ旬報社・1998年を参照。
- 2 映画作品全体では、第7位である。「映画大好き! CINEMA ランキング通信 歴代興収ベスト100」興業通信社 <http://www.kogyotsushin.com/archives/alltime/> (2015年8月15日確認)
- 3 たとえば、日本映画専門チャンネル編『「踊る大捜査線」は日本映画の何を変えたのか』幻冬舎新書・2010年や君塚良一『「踊る大捜査線」あの名台詞が書けたわけ』朝日新書・2011年がある。
- 4 金井壽宏・田柳恵美子『踊る大捜査線に学ぶ組織論入門』かんき出版・2005年は、組織論の視点から『踊る大捜査線』を分析している。
- 5 前掲『踊る大捜査線研究ファイル』参照。
- 6 弘兼憲史『課長 島耕作』講談社 全17巻・1983年~1992年。なお、この作品は『部長 島耕作』『取締役 島耕作』『常務 島耕作』と主人公の出世に合わせてタイトルを変えて継続し、一大シリーズとなっている。現在『会長 島耕作』が継続中である。
- 7 テレビシリーズ第一話における青島本人のセリフにその描写がある。
- 8 後にこの男は、会社役員である柏木雪乃の父を殺害した犯人であることが分かる。
- 9 『踊る大捜査線 THE COMPLETE DVD BOX』フジテレビ・2005年・第1巻(君塚良一(脚本)『踊る大捜査線 湾岸警察署事件簿(シナリオ・ガイドブック)』キネマ旬報社・1998年・p.52)なお、映像に収められた俳優が発する台詞とシナリオガイドブックに記載されたシナリオの台詞には若干誤差がある場合がある(以下同じ)。
- 10 日本における「成果主義」の導入はバブル崩壊後のだいたい1995年ごろだという見方が有力である。たとえば関本浩矢「日本企業における成果主義導入・定着に関する一考察」『商大論集』第57巻第1号・兵庫県立大学・2005年の2「成果主義の歴史」(pp.114-116)参照。
- 11 「ロストジェネレーション」という言葉は、本来は第一次世界大戦後の退廃的な生活をおくっていた世代に関して作家のアーネスト・ヘミングウェイが名付けた言葉であるが、日本では90年代後半から2000年代前半に就職の時期を迎えていた世代を指す。日本の「ロストジェネレーション」に関しては、朝日新聞「ロスジェネ」取材班『ロストジェネレーション さまよえる2000万人』朝日新聞社・2013年を参照。
- 12 マズローに関しては、マズロー(小口忠彦監訳)『人間性の心理学』産業能率大学出版部・1971年、ロジャースに関しては、ロジャーズ(畠瀬直子訳)『人間尊重の心理学—わが人生と思想を語る—』創元社・2007年(新版)などを参照。

- 13 『踊る大捜査線 THE COMPLETE DVD BOX』 第 1 巻 (君塚良一前掲書 p.53)。
- 14 『踊る大捜査線 THE COMPLETE DVD BOX』 第 6 巻 (君塚良一前掲書 p.287)。
- 15 『踊る大捜査線 THE COMPLETE DVD BOX』 第 2 巻 (君塚良一前掲書 p.100)。
- 16 『踊る大捜査線 THE COMPLETE DVD BOX』 第 2 巻 (君塚良一前掲書 p.100)。
- 17 『踊る大捜査線 THE COMPLETE DVD BOX』 第 3 巻 (君塚良一前掲書 p.117)。
- 18 『踊る大捜査線 THE COMPLETE DVD BOX』 第 3 巻 (君塚良一前掲書 p.123)。
- 19 『踊る大捜査線 THE COMPLETE DVD BOX』 第 3 巻 (君塚良一前掲書 p.123)。
- 20 『踊る大捜査線 THE COMPLETE DVD BOX』 第 5 巻 (君塚良一前掲書 p.238)。
- 21 『踊る大捜査線 THE COMPLETE DVD BOX』 第 7 巻 (君塚良一前掲書 p.345)。
- 22 『踊る大捜査線 THE COMPLETE DVD BOX』 第 7 巻 (君塚良一前掲書 p.345)。
- 23 室井の行動規範に関しては、拙稿「刑事ドラマにおける義務 (dharma) の遂行の一考察—ドラマ『相棒』と『踊る大捜査線』を事例として—」『実践女子大学短期大学部紀要』第 36 号・実践女子大学短期大学部編・2015 年 3 月を参照。ここでは室井の行動規範をインドの叙事詩『バガヴァッド・ギーター』における義務 (dharma) の遂行との共通点から論じている。
- 24 『踊る大捜査線 THE COMPLETE DVD BOX』 第 9 巻 (君塚良一前掲書 p.407)。
- 25 『踊る大捜査線 THE COMPLETE DVD BOX』 第 9 巻 (君塚良一前掲書 p.407)。
- 26 『踊る大捜査線 THE COMPLETE DVD BOX』 第 10 巻 (『踊る大捜査線 THE MOVIE シナリオ・ガイドブック』キネマ旬報社・1999 年・p.112)
- 27 『踊る大捜査線 THE COMPLETE DVD BOX』 第 10 巻 (前掲『踊る大捜査線 THE MOVIE シナリオ・ガイドブック』p.113)
- 28 このドラマは月曜 21:00～21:54 のいわゆる「月 9」枠で、1991 年 7 月 1 日から 9 月 16 日まで全 12 話で放送された。内容については、『101 回目のプロポーズ DVD-BOX』フジテレビ・2001 年参照。
- 29 このドラマは、パート 1 が 1993 年 4 月 12 日から 6 月 28 日まで、パート 2 が 1997 年 4 月 14 日から 6 月 30 日まで、どちらも全 12 話、「月 9」枠で放送された。内容については、『ひとつ屋根の下 2』(VHS) (第 1 巻～第 4 巻) フジテレビ・1998 年
- 30 椎尾辨匡の共生思想に関しては、神谷正義「椎尾辨匡師と共生思想」『印度学仏教学研究』第 49 巻第 1 号・2000 年がこれまでの研究や論点を整理している。
- 31 椎尾辨匡『共生講壇』(『椎尾辨匡選集』第 9 巻・椎尾辨匡選集刊行会) p. 7。
- 32 椎尾の共生思想に関して河波昌は、椎尾が属していた浄土宗の影響を指摘している。すなわち、浄土宗の開祖法然に大きな影響を与えた中国浄土教の僧・善導の『往生礼讃偈』の偈文「願共諸衆生、往生安楽国」において「共生」の語が一つの語として述べられる。この場合「共生」は「ぐしょう」と発音され、「共生極楽成仏道」等の偈文となっても展開するのであるが、そこでは常に「共に」ということが不可欠の契機として前提されているとする(河波昌「浄土教における共生思想の展開—とくに椎尾辨匡の立場から—」菅沼晃(研究代表)『仏教を中心とした共生の原理の総合的研究』東洋大学 1999 年・pp.119-120)。いずれにしてもこの「共生 (ぐしょう)」という言葉が椎尾の発想の根幹になっていることは否定できないであろう。
- 33 この「共生会」という法人の活動は、残念ながら平成 7 年に中止された。(河波前掲論文 p.119)
- 34 浄土宗では、単に今のこの世に生きているいきものだけでなく過去や未来へとつながっている“いのち”との「共生」という形で、「共生」思想を深化させている。たとえば、「[[きょうせい]と[ともいき]」[浄土宗ホームページ] <http://jodo.or.jp/information/tomoiki/kyoseitomoiki.html> を参照 (2015 年 9 月 2 日確認)。
- 35 たとえば、村上真瑠「法然上人における諸行と共生」『法然仏教とその可能性』法蔵館・2012 年や、神谷正義「法然教学と共生」『法然仏教の諸相—藤本浄彦先生古希祈念論文集—』法蔵館・2014 年があげられる。